

日本の畜産業界に新風 牧草牛・放牧豚などの精肉店オープン

苦楽園に牧草牛などの小売とイトインを提供する「GOODGOODMEAT(グッドグッドミート)」が7月29日にオープンした。「世界中の食卓を極上赤身肉で笑顔にしたい」というコンセプトのもと、日本の畜産業界で挑戦を始めた代表の野々宮秀樹さんに、話をうかがった。



阪急苦楽園口駅徒歩3分。平日は各々の仕事があるため、営業はメンバーが時間のとれる金・土・日曜のみ。



北海道に取得した自社の放牧牧場。広大な地を駆け回る豚に、バイヤーも「こんなに幸せそうな豚は見たことがない」と感心するそうだ。

会社の経営者たちが 食肉の生産へ

出発点は、「ソーシャルグッドな事業をしたい」。野々宮さんは、学生時代に起業して以来20年間会社を経営し、資本や利益を追求してきた。来年40歳になるのを機に、社会的な事業への挑戦を決める。もともと肉好きという共通項があった経営者仲間が集まり、牧場巡りを始めた。牛舎で工業的に生産される牛を見て、広い牧草地で走り回って育った牛との違いに考えを巡らせた。日本の畜産業界のなかで、安心安全で美味しい食の生産を目指したプロジェクトが始まった。



貿易やIT、アパレルなど多様な業種の起業家仲間たちが集まった。

新たに築く独自の畜産

日本の食肉業界では、霜降りA5ランクの牛肉がもっとも高い評価を受ける。「脂身が多く味の濃い肉が、白ごはんのおかずにもマッチし、高級だ」という認識が広まった」と野々宮さん。畜産農家が利益を上げるには、A5ランクを目指して牛を生産するのが近道だ。穀物主体のエサで脂肪のつきをよくし、柔らかい肉質を作る。さらに生産効率を上げるために、狭い牛舎で大量の牛を短期間

で飼育する。「霜降り肉を求めている消費者ばかりではありません。僕たちも、効率を度外視してでも牧草地で健康的に育てられた赤身肉を食べたいと思いました」と野々宮さん。しかし、放牧牛は広い牧草地が必要で、牛舎では1haあたり1,500頭を飼育できるのに対し、放牧牛では1頭しか飼育できない。また、日本の畜産業界は、牛の繁殖から小売までの間に多数の業者が介在する完全分業制で成り立っているため、A2、A3の評価を付けられてしまう赤身肉の生産を目指そうという流れにはなりにくい。そこで同店では、自社で買い付けた子牛を畜産農家に委託して牧草地で育ててもらう方法で、飲食店への卸売や店舗での小売を始めた。

牧草牛・放牧豚の魅力

土地の狭い日本では牧草牛・豚の飼育は困難で、北海道や九州の一部でしか実現できない。しかし、たくさん運動した筋肉質の牧草牛からとれる赤身肉は適度にサシが入り、アミノ酸などの栄養価が高く、旨味も多い。同店では、今年4月に自社で放牧牧場を取得し、1,500頭の豚の飼育を始めた。牛の牧場も取得し、繁殖から飼育、販売までを完全自社資本で行い、理想の食肉生産を目指す。



お酒を飲みながら楽しめるイトインメニューも提供し、朝から開店まで客足が絶えない。

産官学連携で全国初の挑戦 廃棄物からバイオコークスを生成

神戸市で、廃棄物を循環利用する取り組みが始まっている。昨年度はスターバックスの店舗廃棄物から、近畿大学の技術を用いて固形燃料「バイオコークス」を製造するという、全国初の実証実験が行われた。ゆくゆくは市内の飲食店やコンビニなど様々な業種の事業者から出る廃棄物や公園の剪定枝などをバイオコークス化し、ごみの減量・資源化を進める考えだ。今年度はマクドナルドとモスバーガーが新たに参画し、さらに廃棄物の種類を増やして実験を行う。

バイオコークスは密度が高いため、燃焼時間が長く、輸送コストも抑えられる。



コーヒー豆のかす100%や、紙類や食品残渣(ざんさ)を混ぜたものなどで固形燃料「バイオコークス」を製造する。



今年2月、スターバックスのスタッフとお客が集まり、薪ストーブでバイオコークスを燃焼させた。自分たちが出したごみがどう使われ、どう返ってくるのかを見せることで、環境への意識を高めたとしている。

また、簡単に着火しないため、保管する上でも安全という。店舗にとっても、廃棄コストを削減できるメリットがある。

今後、神戸市は、一般廃棄物処理基本計画で掲げる「2025(平成37)年度までに事業系ごみの排出量の総量を10%削減する(平成25年度比)」という目標に寄与するため、バイオコークスの製造事業者や利用事業者を誘致してリサイクルチェーンの確立を目指す。同時に環境啓発イベントも開催し、資源循環の「見える化」で市民の環境意識の向上にも努めるという。

がん征圧チャリティーイベント 芦屋で開催

リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2017芦屋が、9月2日、3日と芦屋市川西運動場で開催される。これは、がん患者や家族の支援、がん征圧のためのチャリティーイベントで、1985年にアメリカで始まった。日本では、2007年に芦屋で本格開催されたのを始まりとし、今年11回目。年々活動地区は増え、いまや全国約50カ所で行われている。イベントの内容は、夜をまたいで個人やチームでタスキをつなぎながら歩くというもの。再会できたことを祝い、亡くなった方々をしのぶ。そして、夜明けには共に朝を迎えられたことを喜び、また来年再会できることを約束するなどだ。



会場では、がん経験者のみしか参加できない語りの会や、追悼の思いを伝える場所なども設けている。



昨年の様子。走る人や歩く人、募金だけに来る人など参加の仕方は様々。続けていくために、それぞれが無理なくできる範囲で参加ができる。

集まった寄付金は、運営費を除いて「公益財団法人 日本対がん協会」に集められ、患者支援の活動や新薬開発への研究、若い医師育成のための補助金、検診の受診啓発活動など、がん征圧のために使われる。昨年の芦屋からの寄付総額は約170万円。実行委員の城村勉さんは、「たとえ参加者が減っても続けること。帰ってくる場所を絶やさないことが大切」と、地元市民・事業者の更なる参加を期待する。

9月30日(土)は「交通事故死ゼロを目指す日」～9/21(木)から9/30(土)は秋の全国交通安全運動～

協力:兵庫県警察



【交通安全運動 運動重点】

- 子どもと高齢者の安全な通行の確保と高齢運転者の交通事故防止
- 夕暮れ時と夜間の歩行中・自転車乗用中の交通事故防止
- 全ての座席のシートベルトとチャイルドシートの正しい着用の徹底
- 飲酒運転の根絶

兵庫県は他府県に比べ、チャイルドシートの使用率が低調だ。交通事故に限らず、カーブ走行中や急ブレーキをかけたときに座席から子どもが転落し、怪我をする危険がある。6歳未満の子どもには体格に応じたチャイルドシートを正しく着用させることが必要だ。高齢者が道路を横断中に車と衝突する事故も多発している。道路を横断する時は、いつもの慣れた道でも「とまる」「みる」「まつ」を実践することが求められる。秋口は、夕暮れから夜間に交通事故が増加傾向にある。
歩行中・自転車乗用中…明るい色の服装や反射材・懐中電灯を活用する
車を運転中…早めのライト点灯やハイビーム・ロービームのこまめなライトの切替えを行う
上記のような方法で周囲に自分の存在を示すなどし、交通事故防止に努めよう。